

# 水稲時期別技術対策情報 22-2

平成22年5月19日  
新潟県農林水産部

## 分けつ期の栽培管理のポイント

- 1 低温・強風時には、やや深めの保温的水管理で植傷み防止
- 2 ワキの発生には水更新や夜間落水を行い、根腐れ・生育停滞を防止
- 3 中干しは生育診断に基づき、適期を逃さず開始
- 4 わたぼうし等、いもち病に弱い品種を作付けした場合や、いもち病多発地域のコシヒカリBLでは予防粒剤の施用で葉いもちの発生を防止
- 5 農道・畦畔等の草刈りを徹底し、斑点米カメムシ類の増殖を抑制

### 1 田植え後の水管理

- (1) 田植え直後のほ場は、やや深水による保温的水管理を実施し、植傷みを防止する。特に低温や風の強い日は、ほ場をよく見回り田面が出ないように湛水を徹底する。
- (2) 土壤水分の多い状態で耕起したほ場や稲わらを舂すき込みしたほ場では、稲わらの腐熟が進まず、生育初期から土壤が還元状態になりやすい。この場合、水温が高くなるとワキの発生が急激に多くなる。水田内に足を踏み入れ気泡が多く発生する場合には、水の更新や夜間落水を行い、根腐れ・生育停滞を防止する。

### 2 溝切り・中干し

- (1) 中干し開始時期は、下表のとおり茎数が目標穂数の80%（平年の $m^2$ 当たり籾数が2万8千粒を大きく超える過剰生育地域は70%）程度になった頃であり、開始時期に達したほ場は直ちに落水し、溝切り・中干しを行う。なお、山間部の田植えの遅い地帯は、6月10日以降の茎数の推移をみて溝切り・中干しの適期を判断する。
- (2) 本年は4月中の降水量が平年より多く、また土壤が乾燥不十分の状態で行った事例が多いことから、生育期間前半の土壤窒素発現量はやや少ないと推察される。このため、全般に初期分けつの発生が緩慢になると想定されるが、生育の遅速は、ほ場間差が大きいので、ほ場ごとに生育状況をよく確認する。
- (3) 昨年倒伏程度の大きかった地域・ほ場では、生育過剰とならないよう、生育状況をよく確認し、遅れずに中干しを開始する。

### 地域別の中干し開始時期の目安（コシヒカリ）

地域区分 (前提とする田植期、栽植密度)	目標穂数 (本/ $m^2$ )	中干し開始時期の目安	
		茎数	時期
一般的な地域 (5月10日頃、60株/坪(3.3 $m^2$ ))	380	$m^2$ 当たり 300本 1株当たり 16~17本	6月10日
過剰生育地域 (5月10日頃、50株/坪(3.3 $m^2$ ))	350	$m^2$ 当たり 250本 1株当たり 16~17本	6月5日

- (4) 中干しの期間は、生育状況や天候により異なるが、田面に小さなヒビが入り、軽く足跡がつく程度まで継続して行う。土壌が肥沃なほ場や生育量の大きなほ場では強めに、地力がないほ場や生育量が小さいほ場では弱めとする。
- (5) カドミウム吸収抑制対策が必要な地区においては、土壌の還元状態をできるだけ保つ必要がある。このため、溝切り・中干しをやや早めに実施し、中干しの程度は弱め、期間は短めとし、中干し終了後は飽水管理（ほ場内の水が自然に減水し、田面が露出する前に湛水する）とする。

### 3 雑草防除

- (1) 除草剤は「農作物病害虫雑草防除指針」に基づき、適正・安全に使用し、処理後4～5日間は湛水状態を保つ。
- (2) 一発処理剤、中期剤、及び後期剤は、使用時期に十分留意して使用する。
- (3) 薬害防止のため、異常低温時又は異常高温時には除草剤を散布しない。

### 4 病害虫防除

- (1) 「農作物病害虫雑草防除指針」及び「病害虫発生予察情報」に基づき、発生実態に見合った適正防除を行う。農薬の使用に当たっては、適正・安全に使用する。
- (2) 補植終了後に苗を放置しているほ場の割合は、去年は6.5%であった。放置した補植苗は葉いもちの伝染源になるので、補植終了後は速やかに除去する。
- (3) いもち病多発生地域におけるコシヒカリBLで、育苗箱施用剤や側条施用剤による葉いもち防除を実施していない場合は、本田で予防粒剤を施用する。
- (4) わたぼうし等、いもち病に対する抵抗性が弱い品種を作付けた場合や、大豆跡等で生育が過繁茂になることが予想される場合は、予防粒剤を施用し、葉いもちの発生を防止する。
- (5) 斑点米カメムシ類の増殖地をなくし、密度を抑制するため、農道・畦畔等の雑草防除を徹底する。草刈りは5月下旬から、雑草種子が結実しない間隔（およそ3週間）で行う。地域一斉の草刈りは、6月中旬～下旬と7月中旬～下旬の2回とする。

### 5 コシヒカリ湛水直播のポイント

- (1) 葉数が7葉期頃（概ね6月中旬）になったら落水し、溝切り・中干しを行う。
- (2) 土壌硬度を高めると倒伏防止に効果があるので、中干しは移植栽培より強めに行う。中干し以降も間断かん水を行い、土壌硬度を維持する。
- (3) 苗立ちムラで生育が均一でないほ場における溝切り・中干し時期の判断は、 $m^2$ 当たり苗立ち数が40～80本の生育地点を基準にする。
- (4) 生育中期に雑草が発生した場合は、ヒエや広葉雑草などの草種に合わせて適期に除草剤を散布する。

【照会先：経営普及課普及指導員（専門技術指導担当） 水沢誠一 TEL 025-280-5302】